
勇者の召喚者。

オリエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の召喚者。

【Nコード】

N5358Q

【作者名】

オリエ

【あらすじ】

勇者や魔王、魔法使いや魔物なんて、今は昔のこと。

人々は精霊の加護を受けながら、毎日平和に暮らしています。

キャラバンで旅をしながら暮らす私は、

しかし間違えて、この平和なご時勢に勇者を召喚してしまったのです！

1 『キャラバンの娘』（前書き）

勇者の召喚者。ですが、1話から書き直しました。

勝手ながら全く設定が変わって基本別の話になっています。

本当にすみません。それでも楽しんでいただければ幸いです。

1『キャラバンの娘』

緑溢れるクランセクト大陸西のクレスト王国、その片田舎のミスティルド。

農地に囲まれ、茅葺き屋根の家々が立ち並ぶ真ん中、唯一石畳の引かれた小さな通りが、ミスティルドの要である。

通りの中央、水が噴き出すだけの簡素な噴水がある広場は、普段は2・3人の子供が遊ぶ静かな場所だ。

しかし、今日は、雑然とし、人々が溢れんばかりに入り乱れていた。

人々が、いつになく賑やかに取り囲んでいるのは、ゼクと呼ばれる馬のような家畜に乗った40人ほどの一団とその荷である。

半年ぶりに隊商^{キャラバン}が来たのだ。

昼過ぎてようやく街に入った途端、ミスティルドの人々に取り囲まれた。ちょっとしたお祭り騒ぎだ。

半年に1回ほど来るキャラバンは、この街にとって大切な交易相手だ。キャラバンは数日間滞在して、市を開き、貴重な物や珍しい物、必要な物を落としていく。そのため、街の人々はキャラバンの到着をとてもしみにしている。

ずっとキャラバンで育ってきたヨルダは、どこの街に行ってもこ
うだから慣れてはいるけれど、それでも歓迎されるのは嬉しい。

ヨルダは、隣にいる父、兄と同時に馬上からすらりと降りたった。
隊長である父が、まず人々に声をかける。

「お久しぶりです、みなさん。

大変なご時勢ですが、半年前と変わらず暖かい皆さんに出会えて
嬉しく思います。

今回も様々な品をお持ちいたしました。数日間留まる予定ですの
で、どうぞよろしく願います」

父が礼を取るのと同時に、キャラバンの仲間とヨルダも礼をとっ
た。

歓声があがり、人々の間から、一人の老人が進み出た。白い髯を
長く伸ばし、相当な高齢であるが、背筋をしゃんと伸ばしている。
街の長老である。

「お久しぶりですな、ヴァイン殿とキャラバンの皆さま。お元気そ
うで何より。

街の皆も、楽しみにしておりました。今回もまた、お世話になり
ます」

「こちらこそ。市は明日から開きます、楽しんでいただければ幸い
です」

「おお、横にしているのは、リユークとヨルダか？大きゅうなったの。」
「はい。おかげさまで」

「ヨルダはまた綺麗になったのお。これでは、街の男連中が放って
おかんわい。気をつけるんじゃぞ」

「えーっと、ありがとうございます？」

ちよっと返答に困った。

長老は、ヨルダと兄のリユークに目を合わせ、孫を見るかのように、皺くちやの目を細めて笑った。

細長くて折れそうな、けれど暖かい手を伸ばして、ヨルダの頭を撫でる。

リユークは22、ヨルダはもう18にもなるのに、長老はいつもヨルダたちを子供扱いする。父に子供扱いされると腹が立つが、なぜかこのお爺さんに撫でられるのは、嫌ではなかった。くすぐったいけれど。

一通りの挨拶が済み、人々がぱらぱらと散っていくと、ヨルダたちは宿屋へ移動した。

「リユーク、ヨルダ。俺は用事があるから、ここは頼むぞ」

「はい、父上」

「うん。いってらっしゃい」

隊長である父は、到着したばかりは何かと忙しい。

その間に、長旅で疲れたゼク達を休ませ、明日の市のために荷をほどき、整理しなければならぬ。

父がいない間、キャラバンに指示を出すのは、後継ぎのリユークの役目である。

昔は、リユークも色々と失敗をやらかしていたけれど、今では立派な副隊長で、ヨルダの自慢の兄になっている。父と同じ砂色の髪とよく日焼けした肌を持つリユークは、頼りがいのありそうな雰囲気から、行く先々の街でもてもてだ。

それに比べて、ヨルダはちっとも日焼けしない弱々しい自分の白い肌が嫌いだ。お婆さんのような長い銀髪も嫌だった。

（もっと凛々しい逞しい父さんやリユーク兄のようになりたい。あと

筋肉が欲しい。)

ヨルダがこっそり溜息をついている間に、リユークは仲間次々と指示を出していく。

「レックス、食い物は痛んでないか確認しておいてくれ。ユリウス、明日の市の天幕を出してくれ」

「リユーク、私はゼクの世話のほう行くな」

「頼む。——ああ、待てヨルダ」

「何？石の鑑定が必要なやつは、後でやるよ」

「ああ、それも頼む。」

「いや、そうじゃなくてだな」

リユークが途端に神妙な顔つきになった。ヨルダの肩に両手を置いて、言い含める。

「さっきの長老も言ってたろ？

いいか、変な男について行くなよ。いやむしろ、うちの隊員以外の男に話しかけられたら無視してもいい！

とにかく、なるべく大人しく宿の中にいて、だな」

「……いやいやいや、そんな心配いらないって。あれはお世辞だから！今までだって、そんなことなかったし！

心配性だなあ。忙しいから、もう行くね！」

「あ、おいヨルダ！」

また後で、と叫びながら、ゼクの小屋へばたばたと逃げた。

父よりも心配症なリユークが、こんな説教をするのは、毎度のことだ。その上、毎度長い。

(心配されるのは嬉しいけどさ、全く見当はずれな心配を何度もさ

れると、少し鬱陶しいよね。

むしろ、毎回女の子に囲まれちゃうリユー兄の方が心配だよ……。

）

ぶるるる、と嘶くゼクを撫で、餌を用意しながら、ヨルダは今日2回目の溜息をこぼした。

一通りの準備が終わって夜、宿屋の食堂では歓迎の酒盛りタイムだ。

心配症のリユークと父によって、ヨルダは宴には出ない。元々、お酒の匂いが好きなほうでもない。他の隊員は皆宴に出ているので、寝室の並ぶ2階は、静まりかえっている。

時折聞える下の階の笑い声に耳を傾けながら、ヨルダは宿のベッドに、ごろごろと横たわった。

前の街から1週間ほど野宿だったから、久々の布団の感触が心地よい。

もう少し寝ないで、このままベッドの感触に包まれていたいと思っ
っている時に限って、階段が軋み、誰かが上ってくる音がした。

ほどなくして、ヨルダの部屋の扉がノックされる。

「お嬢、起きてます？リオンです」

「うん、寝る直前だったけど。何か用？」

「隊長が下へ呼んでます。なんでも、長老が珍しい石をお持ちで。精霊石かどうか鑑定してほしいと。」

うとうとしていたヨルダはその一言でパツチリ目を開いた。
精霊石。

宝石が、中に精霊を宿している精霊石かどうかを鑑定できるのは、
このキャラバンではヨルダだけだ。

「わかった。今行くわ」

《勇者や魔王、魔法使いや魔物なんて、今では数百年も昔のお話。
勇者が魔王を倒し、全ての魔物が消えそうになったとき、全ての
母であるレイジエ女神は、魔物を憐れみました。

レイジエ女神は、魔物達を『この世で最も輝ける、そして美しい
存在——宝石』に変えました。

何百年が経ち、争いもなく、すっかり平和な世の中で、宝石にな
った魔物は穢れがなくなり、精霊へと変化していきました。

数ある宝石の中でも精霊を宿すものは精霊石と呼ばれるようにな
りました。精霊石から、召喚できれば、その人はその精霊の加護を
受けられるようになりました。

雪の精霊の加護なら、寒さに強くなり、夢の精霊の加護なら、毎
日良い夢を見られる、などなど。

召喚できるのは、その精霊と相性が良い人だけと決まっているそ
うですが、人々はみんな、自分の精霊を持つことに憧れています《

『良い子の神話2巻』より。

（そのため、裕福な人間がこぞって欲しがるから、精霊石は高価で取引される、か。

長老くらいの方だったら、精霊石の1つや2つ持っていてても可笑しくはないな）

納得しながら、ヨルダは食堂の扉を開いた。

むわっとするこもった空気と酒の匂いが流れだす。

上座に座る父が、機嫌良く笑って手招きした。隣には、リユークと長老が座っている。

「おお、ヨルダ。こつちだ、早くおいで」

「こんばんわ、長老様。珍しい石があるとか？」

リユークの横に腰を下ろしながら尋ねると、長老は、机の上の小箱をヨルダに見せた。

中には、手のひらにすっぽり収まる大きさの丸い黒い石が入っている。とにかく真っ黒。

「な？珍しいよな、この色」

リユークも興味津津で石を見つめている。

精霊石の色は様々だが、普通は煌びやかな華やかな色や、逆に淡い色などであることが多い。紫や碧や赤や青、ピンクや白などなど。真っ黒は初めて見た。

「どうじゃろう？精霊様は居られそうかの？」

「ヨルダ、見てやってくれ」

3人から期待のこもった目を向けられ、ヨルダはそっと石を手にとった。

両手で包みこむようにしながら、右耳にあて、目を閉じた。
こうすると中の精霊の笑い声や息遣いが聞えたり、鼓動が聞えたりする。精霊によって様々だけれど、いることがわかるのだ。
精霊をこうして感じる事ができるヨルダにしか、わからないが。

「……………」

「どうじゃ？」

「だめか？」

「……………いる、かな……………」

「おお！」

「どんな！？」

「ちよつと待って……………まだ……………」

（何も聞こえないけれど、なんだか暖かい感じがする。
だから、いるみたいだけど。なんだろう、何か違和感が……………）

いつになく存在が掴みにくくて、ヨルダはさらに集中しようと眉根をよせた。

が、だんだんと、石の熱が上がってきたような気がする。

（なにこれ。熱くなって……………熱っ！！）

触れないほどになり、思わず石を取り落としてしまった瞬間。

その時——

「うわああっ」

「うっ……………！！」

「ぐあっ
」

黒い石から、目が眩むほどの閃光がほとばしった。

1『キャラバンの娘』（後書き）

はじめまして。

お付き合い頂きありがとうございます！

拙い物語ですが、楽しんで頂けるよう、がんばっていきます。
ご意見、ご感想等、お待ちしております。

2 『異世界の青年』

幾島洸夜^{いくしまこうや}は、我ながらキチンとした青年男子だったと思っている。幼稚園の頃は泥だらけになって友達と遊び、小学校中学校では部活に励みながら馬鹿騒ぎし、高校ではそれなりに受験勉強し、大学ではそれなりに怠惰に、飲み会やサークルに顔をだしてきた。それなりに人づきあいをし、人並みに悩み、ほどほどに楽しくやってきた。

反抗期やら初恋やらも時にはあったが、まあ、甘酸っぱいとかいう良くも悪くも思い出だ。

そんな絵に描いたような平凡な自分が、何故いきなり異世界トリップとやらをしないではいけないのだろうか。

ようやくレポートを提出し終わり、夏休みを迎えた8月。

一人暮らしにクーラーは贅沢なので、扇風機で暑さを誤魔化しながら、大学生らしくぐだぐだしていた。

しかし、憎き地球温暖化のおかげで、猛暑だ。部屋の中においても湿気を含む暑さが迫ってくる。

「うし！こういうときは、コンビニだ！」

景気づけに独りごとを叫びながら、家をでた。

クーラーがあり、雑誌がある。市場の楽園コンビニを求めて。

覚えているのは、そこまで。

突然の閃光に貫かれ、視界が真っ白になった。

「うわああっ」

「うっ……!!」

「ぐあっ」

誰かの悲鳴を聞きながら洸夜は、必死で目を抑えた。眩しすぎて痛い。

しばらくして、薄く瞼を開く。大丈夫そうだと分り、今度は瞬きしながら、しっかり目を開いた。

「……は？」

見えた光景にぼかんとして、洸夜は再び目を閉じ、そして開いた。

（おいおい……幻覚かよ？）

しかし、景色は変わらず、洸夜は目を擦った。何度も。

どこかの食堂のようだった。

木で出来た大きなテーブルがいくつも並び、酒や見たこともない食べ物がいざなりと並んでいる。

先程まで歩いていた、コンクリートの道路も、味気ないビルに囲まれた空もない。

洸夜と同じように目を擦りながら、周囲の人が起き上がりはじめた。

彼らの服装がまた問題である。

見たこともない民族衣装のような物を着ている人や、ファンタジーのテレビゲームで出てくるような古めかしい服を着ている人ばかりだ。そして明らかに日本人ではない。

なんというか、洸夜と住んでいる時代や場所が果てしなく違うような。

彼らは、洸夜を見て、痛みも忘れて、いきなりぱちりと目を見開いた。

一気に大勢の注目を集めて、洸夜は少したじろぐ。

「あ、えっと……」

「おお……？」

「なんと、人型を取れる上位精霊か！」

「ほおお！」

「よくやったヨルダー！」

「お嬢が精霊を召喚したぞ！」

どつと歓声が上がった。

いきなりテンションが上がった人々に冴夜は一人付いていけない。さらにぼかんとしてしまった。

「えええ？何だここ、何だこれ……ていうかホント何なんだ！」

わあわあ何か言ってくる人々に困りながら、冴夜は周囲を見渡した。誰か、何でもいいから説明してほしい。

助けを求めて、視線を彷徨わせると、向かいにいる少女とばかり目が合った。

周囲の人とは違い、彼女だけは冴夜と同じ、わけが分らないという表情を浮かべている。

自分と同じテンションの人間に安堵を覚えながら、

(綺麗……)

思わず見蕩れた。この状況で何をしているんだ本当に。

けれど、テレビで見たどんな美人よりも、素直に綺麗だと思った。女の子としてどうかという話ではなく、名画や写真を見るような気持ちの『綺麗』。

流れる銀髪に、白い肌。整った顔立ちながら、頬はまだ少しふつくらとして、幼さを残している。その頬は、こもった部屋の熱気で僅かに紅潮し、逆に元の肌の白さを引き立てていた。

そして茫然と見開かれた瞳が、一番目を引く。

右目は金とも黄色とも言えないような、甘い琥珀色。

そして左目は、海外リゾートの海を思わせるような、輝く青。

まるで人形のような容姿だが、その驚いた表情は、生き生きとしている。

彼女の小さな形の良い唇が、ゆっくりと動いた。

「あ……。」

「ちがう……?」

彼女は、洗夜を見て困ったような顔をしてから、隣で喜んでいる砂色の髪 of 壮年の男に声を掛けた。

「父さん、ちがう！」

彼は、精霊じゃない、みたい……。」

「何?では、何だというんだ」

「分らないけど……普通の人に見える」

首を傾げる彼女の言葉に、周囲の人がいきなり静まりかえった。

(何だ何だ、さっきから。空気がころころ変わるな)

一層じろじろと見られて、洗夜はさらに居心地が悪くなった。
だが、何か言うなら今かもしれない。

「あの！すいません、何が何だか分らないんですが。」

俺は、普通の日本人です！ここはどこですか！日本語通じてますか!？」

「やっぱり、普通の人だよな?」

「え、うん、もちろん……。」

少女にずっと身を乗り出して尋ねられ、洗夜は赤面しかけた。
尋ねられた内容は変だが。

「そう。私はね、精霊石を調べていたの。そしたら、いきなり光が

溢れて、貴方が現れた」

「精霊……。うん、色々ツッコみたいことはあるんだけど、とりあえずさ」

「はい？」

「ここつてもしかして、異世界？」

これが、幾島洸夜いくしまこうやの異世界トリップの始まりだった。

あの後、彼女——ヨルダという少女とよくよく話して、説明されてわかったこと。

まず、ここは異世界。元の世界に精霊なんて存在はないからだ。それに明らかに異国風な人々と会話が通じることも、異世界トリップのお約束と言われれば、納得できなくもない。

そして、同じように異世界トリップする奴が、遥か昔の御伽噺にはいたらしい。

けれど、帰る方法なんて全くもって分らない。なぜなら、御伽噺だから。

俺は、帰れないらしい。

目が覚めたのは、昼過ぎだった。

（ああ——家じゃないんだっけ……）

アパートの畳じゃない感触で、すぐに思い出した。ここは日本じゃない。そのことに、寝起きからがっかりした。ベッドから出ると、もう日が高いことがわかった。昨日貸してもらった不思議な形の寝巻のまま、廊下に出ると、宿屋にすっかり人の気配がなくなっていることに気付く。

（困ったな……）

誰もいないみたいだが、寝巻らしい姿で食堂に降りるわけにもいかない。昨日の服は、部屋には置いてなかった。だが、どうしていいかもわからない。

（何も、わかんねえよ）

途端に心もとなさから、悔しくて堪らなくなった。ぎりつと下唇を噛む。

何でいきなり、こんなわけの分らない世界に放り出され、途方に暮れなければならないのか。

こちらの寝巻の着方もわからなかった。お腹は空いたがどうしたら食べれるのかもわからない。そもそもお金もない。下へ降りていけばいいのか、待ってればいいのかもわからない。

どうしようもない苛立ちに包まれそうになった時、

「あ、おはよう」

後ろから、ぱたぱたと駆け寄る小さな足音と声に、はっとした。見る見るうちに、苛立ちが安堵に変わったのを感じる。振り返ると、ヨルダが安心させるように微笑んでいた。

「よく眠れた？ごめんね、誰もいなくて。困ったでしょ」

「いや、そんなことは」

「はい、これ今日の服。昨日の服は洗っちゃってるから」

ありがとうと言いかけて、気付く。自分は、今寝巻姿を晒している。

「あつ、ごめん、こんな格好で……」

「平気。隊員たちので、結構見慣れてるから。みんなそういうところ、気にしないし。」

着替えたら、下に降りてきて？」

「わかった」

ヨルダは服を手渡すと、さつさと下へ降りて行っちゃった。繊細そうな見かけによらず、随分とサバサバした感じの子だ。

手渡された服を着て、食堂に降りると、ヨルダ以外誰もいなかった。

「あ、ちゃんと着れたね。よかった」

「うん、なんとか……」

タートルネックのシャツのような上衣に、普通のズボンのような下衣。さらに薄い前合わせの上着を羽織って帯で留める。服と一緒に渡された、黒い石に紐を通してあるペンダントもぶらさげている。日本では、男がアクセサリーなんてあまりつけないため、違和感がある。

そして、ヨルダの服も見慣れない。

タートルネックの膝までのワンピースのようなものを着て、その上から足首までの長い巻きスカートのようなものを付けている。

飾りの少ない服だが、余計な飾りが無い方が、ヨルダには似合っ
てみえた。

「その首飾りね、コーヤさんがやってきたときの石」

「あ、これが例の」

「うん。コーヤさんが来るまでは、確かに精霊か何かの気配があったんだけど……」

今では、ただの宝石みたい。本当は長老のなんだけど、コーヤさんに関わるものだからくれるって。

一応、持っておいた方がいいと思うから」

「そっか……。ありがとう」

慣れないが、このままペンダントは持っておいたほうがいいようだ。

洗夜が、礼を言いながら近くのテーブルに落ち着くと、ヨルダが食堂の奥から、食事を運んできた。

「どのくらい食べるかわからないから、ちょっと多めに用意してあるの。食べたいだけ食べてね」

いくつかの皿を並べながら、木製のスプーンのような物を渡され、手づかみなどでないことに密かに安堵した。

黒っぽいパンのようなものと、スープ、日本とあまり変わらない野菜のサラダ……食べ物は、洋食風だが似ている。

いただきますと、手を合わせて食べはじめると、ヨルダはきょとんとした。

構わず、スープを口に含むと、暖かさがじんわり滲みた。コンソメスープとあまり変わらないのが嬉しい。

「美味い……」

「良かった。作ったのは私じゃなくて、食堂の人だけだね」

「向こうのものと味が似ている……」

「そう？」

少し齒ごたえのあるパンらしきもの、ちょっと辛いドレッシングのかかったサラダも一気に平らげ、さらにお代わりを3度繰り返して、ようやく満足した。

思った以上にお腹が空いていたらしい。

どんな状況でも、元氣にお腹が空く自分が少し情けなかったが。

「ごちそうさまでしたと再び手を合わせると、ヨルダは嬉しそうに笑った。

「不思議な食事の挨拶だね」

「うん。満腹。満足！」

「……食べてから言うのも何なんだけどさ……」

洸夜が言い淀むと、ヨルダは食器を片づけながら遮った。

「代金は、いいの。宿代と一緒に父さんが払ってくれてるから」

「……ありがとう。でも、いいのか？」
「うん。私達もさ、旅してるから。見知らぬ土地での苦労はよく分るんだ」

父さんが苦勞してるだけで、私はついていけただけなんだけど、と
いつてヨルダは照れたように笑った。

洸夜はそれを見ながら、少しだけ顔を暗くした。

（会ったばかりで助けられる。それは、本当にありがたい。じゃ
なきゃ、すぐ野垂れ死ぬ。

けれど、俺がここに来ちゃった原因が、あの子が石を触ったこと
なら……素直に、喜べねえ……）

自分の心の狭さが情けないのと、いきなり世界を放りだされた悔
しさが相俟って、洸夜は気持ちをもてあましていた。

2 『異世界の青年』（後書き）

いきなりコーヤ視点。

今度はコーヤとヨルダの視点を話ごとに行ったり来たりします。

3 『女神の愛し娘』

ヨルダとコーヤしかない食堂は、がらんとしていた。食堂の人
も、今は広場で開かれている市に行っているだろう。

ヨルダも本来ならば、市で忙しく働くはずだが、昨日、不思議な
青年を召喚してしまったために、お休みを頂戴した。

青年の案内と世話が、今日の予定だ。

食器を片づけながら、ヨルダは横目でコーヤを観察していた。

短い黒髪に、同じ真っ黒の瞳。さっぱりとした、しかしどこか賢
そうな端整な顔立ち。

見たところ、ひどく落ち込んだり取り乱したりする様子はないも
のの、その表情は冴えない。

（まあ、当たり前だよな。突然、異国に飛ばされたのと同じ感覚な
ら……。ううん、帰れないなら、もっとだよな。

だがしかし！私まで落ち込むわけにはいかないっ！）

一人で気合を入れなおし、コーヤの向かいに座った。

これからする話に必然的に、胃が痛くなる気持ちがあるが、こっ
ちが暗い顔をしていては、コーヤがますます不安になるだろう。

ヨルダは、にこにここと笑みを絶やさずに切り出した。

「あのね、ちょっと話があるんだ」

「うん」

「はつきり言うのは辛いけれど、今のところコーヤさんは帰り方が
分らない。そうだよな？」

「……だね」

コーヤは諦めたような苦笑を洩らした。コーヤの表情をしっかりと見つめながら、慎重に話すことを考える。

傷つけないように、これからのことを相談しなくてはならない。

「これから、どうしたい？何か考えはある？」

「無理って言われても、帰る方法を探したいかな。何年掛ってもいいからさ」

「……そっか、わかった。でね、それなら、どれだけになるかは分らないけれど、ここにいる間は暮らしていかなきゃいけないでしょう？」

だから考えておいて欲しいの。どうやって暮して行きたいか。まだ、全然見当もつかないだろうけど、私達キャラバンは、数日間はこの街にいる。その間にどこで、どう暮らしたいか、じっくり考えて。

何か、やりたいことやなりたい者があつたなら、私の父さんが出る限り取り計らってくれる」

そこまで一気に喋って、コーヤの返事を待つ。冷静な人なのか顔に表情が出にくいのか、苦悩を外には漏らさず、少しだけ俯いて何かを考えているようだった。

少しの間、沈黙が流れ、外の市の喧騒に耳を傾けた。

まだ勇者や魔王が存在したと言われる時代。およそ、千年近く前の頃には、異世界からの迷い人はいたと言われる。彼らは必ずこの世界に、様々な発明や影響を残してくれたらしい。そのうちの一人が、勇者であると。

けれどその中で、帰ったという話は全く残っていない。語られていないだけかもしれないが、その代わりに生涯こちらで過ごした人の伝説などは残っている。

ヨルダたちが知らないだけで、帰れるのかもしれない。しかし、期待は全くもてないだろう。

コーヤは、ゆっくりと顔を上げて、口を開いた。

「まだ、どうやって暮らせるのかも分らない。けど、しばらく考えておくよ」

「ありがとう。分らないことがあったら、何でも聞いて頂戴」

ヨルダは、安堵の笑みを浮かべた。

これで、ひとまずは大丈夫。身の振り方さえ決まれば、いつかこの世界の暮らしにも慣れるだろう。まずは、生活の安定が必要なのだ。

そうと決まれば、あまり時間はない。数日のうちに、決めてもらわなければ、ヨルダたちはこの街を離れてしまう。長老にもお願いはしておくけれど、やはり、ヨルダがきちんとそこは世話するべきだ。

先程までと変わって、ヨルダは元気な声を張り上げた。

「よし！じゃあさ、市に行かない？キャラバンが到着すると、しばらく市を開いて、貴重品から日用品まで色んな物を商売するのよ。勉強にもなるし、みんなの暮らしも見れるわ」

小さな石畳の通りは、大量の露店で埋め尽くされていた。色とりどりの商品が雑多に並べられており、目移りしてしまう。

昼過ぎの暖かな日差しの中で、商人たちはせかせかと、街の人々

はゆつたりと市を楽しんでいるようだ。

コーヤを連れて、ヨルダは一軒の露店に、顔を覗かせた。

床のシートの上に、様々な品物が並べられ、さらに簡易の棚にもずっしり商品が詰まっている。そのどれも貴重品というわけではなく、普段から見慣れた日用品ばかりだ。雑貨屋さんだから当然なのだが。

「セムットおじさん、こんにちは」

「おお、ヨルダちゃん！その兄ちゃんは、昨日の方かい。なんか入用かね？」

「うん。地図をちょうだい。王国のものと、世界地図の両方」

「あいよ。1500リゾだが……まあ、ヨルダちゃんだ。1200でいいよ」

「ありがとう！」

キャラバンは、様々な商人たちが旅を安全に過ごすための集団だ。旅の間は、命運を共にする仲間だけれど、街では別々の商売仲間となる。オマケはしてくれるが、基本的に商品はお互い普通に売買し合っている。

買ったばかりの地図を、そのままコーヤに手渡した。

「もらっていいの？」

「うん。コーヤさんに必要だと思うから。ちょっとこっち来て。それを開いてみて」

人の少ない道の端に手招きして、地図を開かせた。

3つの大陸と数々の島が描かれてある世界地図。その中で一際大きい三日月型の大陸を示す。

「ここが今いるクランセクト大陸。左下半分くらいのここが、クレ

スト王国。歴史、文化溢れる王国って言われるよ。で、その北側のこの川辺りが、この街ミスティルド。

ここまでで、何かわからないことあった？」

「や……けど、やっぱり全然別の世界だって再認識だ」

コーヤは、ちょっと堪えるなーと言いながら、軽く目を伏せて見せた。その顔が苦しそうで、無理していることがありありとわかった。

ヨルダが返事をできないうちに、コーヤは慌ててこっちを向いて言葉を繋いだ。

「あ、でも！新発見！……オレ、どうやら字読めるみたいだ。地図に書いてある地名、日本語——オレんとこの言葉じゃないのに、普通に読める」

「言葉違うの？」

コーヤの発音に問題はないし、スラスラと話しているから、てつきり同じ言語かと思っていた。さらに、字が読める人は普通の町人などでは少ないため、驚きだ。

ヨルダは商人の娘として、手伝いのために一応読み書きはできるが、幼い頃の父の躰のおかげである。

「うん多分。なんか自動で翻訳されてる気がする。便利だよなー」

「それなら、働き口はいっぱいあると思う！良かった！」

「へへ、ありがとー」

普段の他人行儀なお礼ではなく、気軽な、けれど嬉しそうなお礼だった。笑顔も力チ力チの綺麗な笑顔ではなく、崩れるようなにへらった顔。

ようやくコーヤの柔らかい表情を見て、こちらまで嬉しくなる。

地図をたたみながら、先程より軽い足取りで、さらに露店を廻った。

異国の骨董品に、高価な装飾品。主食の穀物に、手に入りにくい南国の果実。

ありとあらゆるものを一つ一つ説明しながら、ゆっくり歩く。途中で、軽い帳面と筆記用具を購入し、コーヤは必要なことを書き留めながら進んだ。

広場の真ん中辺り、一番いい場所に、父とリユークの店がある。他の露店とは違い、床に直接商品を並べず、簡易のテーブルの上に綺麗に整頓して置いてある。少し上品で、高級な店に見える。

近寄ると、商品を整理していた父が顔を上げた。

「父さん、調子は？」

「まあ、見ての通りだな。次の街の方が売れそうだ。コーヤくん、調子はどうだい？」

「あ、はい。えっと大丈夫です」

いきなり話を振られたコーヤは若干しどろもどろになりながら答えた。

ヨルダは、商品の様子を素早くチェックする。売れ行きのもの何個かは減っているが、その他に変わりはないなさそうだ。高級品だからこの街ではあまり売れないのは予想済みだ。

商品を一つ手に取り、コーヤに見せる。

日差しを受けて、精霊石が一瞬きらりと輝いた。

「見て。これが精霊石の本物。うちの店では、精霊石を商っている

んだ」

「へえ……。じゃあこの中にホントに精霊が入っているの？」

「物理的に入っているわけじゃないけどね。割ったって出てこないし」

ヨルダは言いながら、そっと両手で包み、右耳にあてる。

——くすくすくすつ

どこからでもなく、頭に直接可愛らしい笑い声が響いた。悪意のこもった声ではなく、くすぐったがるような無邪気な高い声。

「こうするとね、私には精霊が居るってわかるの。これは、果物の精霊さん」

「いいなー。オレも聞きたい！」

コーヤがいつになく、目を輝かせている。興味津津だ。

父が嬉しそうに、呆れたように苦笑した。自分の商売に興味を持つてもらえて嬉しいのだろう。手を休めて、ヨルダ達の傍に寄ってきた。

「それは、残念だな。『女神の愛し娘』めがみのいとこと言ってな。銀髪に琥珀の瞳を持つ女性は、女神の恩寵を受けているとさ。

その女性たちだけが、石の中にいる精霊を感じ取れる。ヨルダみたいにな。だから、精霊石かどうかの鑑定はヨルダの役目なんだ」

「ふあ、ファンタジー……」

「俺も一度は聞いてみたいものだが。召喚された精霊なら見えるが、

精霊は加護を与えた召喚者以外にはあまり姿を見せんしなあ」

髪と同じ砂色の無精ひげをさすり、父が溜息と共に説明した。ちよっぴり残念そうだ。

そもそも精霊石を買えるような裕福な人間は、周囲にあまりいない。商品の石ならともかく、召喚された後の精霊を見たことはヨルダにもなかった。

——くすくすくすつ

こんなにもはっきりと声は聞えるのに、父やコーヤには聞えない。ヨルダにはとても不思議に思える。

——くすつ、コーヤ！

笑っていた精霊が、嬉しそうに隣りに立つ青年の名を呼んだ。ヨルダは、思わず石から耳を離してしまう。ヨルダの様子に、父とコーヤは首を傾げた。

「どうした？」

「なんか……今、ありえないことが……。でも……？」

うーん、と一人で唸る。果実の精霊石をテーブルの上に戻し、試しにもう1つ手に取り、耳にかざした。葡萄色の霧の精霊石だ。

——あら……コージャ？

綺麗な大人の女性の声が、やはり青年の名を呼んだ。霧の精霊石も、テーブルの上に戻す。そのままへなへたとテーブルに寄りかかった。

茫然と腰を抜かすヨルダに、傍らの2人が慌て始める。

「おい、どうした！体調でも悪いのか？」

「父さん、コージャさんが……。もし、そうなら……」

「おい？」

「……父さん！センの箱はどこにある！？」

「は？いや、いつも通り——」

「出して！」

勢い込むヨルダに気圧されたように、父が釈然としない顔のまま、言うとおりにセンの木箱を取り出した。センは、良質の木材として有名であり、そんなセンの小箱に入っているのは貴重品と決まっている。

商つ品の中で、最も貴重な値段のつけられない……いや、市場に出せない商品。

5大精霊の1つ、植物の大精霊が眠る、乳白色の地に虹色の輝きを抱く精霊石だ。

おそるおそる取り出すと、いつもより慎重に耳を近づけた。

3 『女神の愛し娘』（後書き）

宝石の例え方に迷います。

そもそも知ってるほど宝石もってないよ！設定作る前に考えようよ！

4 『精霊の愛し子』

洗夜は、突然様子の変わったヨルダを見つめながら、困ってしまった。

彼女は真剣な顔で、高そうな小箱から、これまた高そうで、手の甲くらいの大きい宝石を取り出した。不思議な光沢を放つ、元の世界でいうオパールに似ている。昔、母親が小さい指輪についていたオパールを自慢気に見せてくれたことがあった。なんでも、若い頃父親が送ったものだとか。生活に困ったら、これを質に入れてやるわ！と叫んでいた。

ヴァインと名乗った彼女の父親である壮年の男性も、困り顔で彼女を見つめていた。

本人は、先程と同じように、耳に石を当てて目を閉じている。海岸で拾った貝殻に耳を当てるかのように、そつと。聞えない波の音を、聞こうとするような仕草だ。

しばらくするとヨルダは静かに目を開け、琥珀と青の両目で、こちらをじつと見上げてきた。

「『せいれいのこころし精霊の愛し子』……」

ポツリと呟かれたヨルダの言葉は、意味がわからなかった。ヴァインに説明を求めようと見やると、今度は何故かヴァインが茫然としている。だから何なんだ。

「まさかコーヤくんがそうだと？」

「うん。間違いないみたい。……コーヤさん」

付いていけない会話にそろそろ口を挟もうと考えていたところに、

急に話を振られた。

ヨルダが、そつと高そうなオパールもどきを差し出す。

「受け取って」

「は……？」

「受け取って！」

「は、はい……」

強く言われて、思わず言われた通りのオパールもどきを両手に取った。ごめん、ほんとごめん、先に説明してほしい。

そんな願いも空しく、ヨルダは更に注文を加える。

「そのまま、地面に落して」

「は！？割れるぞっ」

「いいから、落とす！」

ダイヤモンドは何よりも固いと聞くけれど、他の石はどうなんだろうか。

（母さんの指輪は百万程度つってたな……。これもつと高そうなんだけど！いいのか！？）

持っただけで緊張するのに、これを割れと。いやでもさっき、ヨルダは『割ったって精霊は出てこない』と言っていた。

「落として、コーヤさん！」

もうわけがわからず、父娘2人がじっと見つめてくるのもあって、洗夜はやケクソ気味に、両手を開いた。

ぱつと石が落ちてゆく。

地面に引かれるように落ちてゆき、地面に触れる――

その時確かに、何かの割れる音がした。

昨日のような閃光ではなかったが、またひどいことになった。

ガラスが割れるような音が響き渡った直後。

「……」。

この木なんの木気になる木……じゃなくて!!」

思わず歌ってノリ突っ込みという高等テクニクを使ってしまっ
たが、現実逃避している場合ではない。

目の前には、屋久杉もかくやというほどの巨大樹が立ちはだかっ
ていた。

人間を束にしても足りないくらいの太い幹、豊かな葉を何枚も揺
らす梢。

ヴァインのお店は潰されなかったものの、広場の空いていた空間
が、すべてこの樹で埋め尽くされている。

梢の間から、キラキラと日差しが零れて、綺麗だった。

歴史ある佇まいに感動。

している場合ではなく、慌ててヨルダに説明を求めた。

「おおおい、どうなってんだ、いいのこれ!!」

「あ……、うん、きつと大丈夫」

「いやいやいやいや！そんなアバウトなこと言っていないで説明！」

落とせと言ったくせに、この事態は予測していなかったらしいヨルダが曖昧に頷いた。

「精霊にも格があつて、そのトップにたつ5つの精霊は、5大精霊って言われるの。火と水と木と金と土。彼らは、普通の人には召喚できない。『精霊の愛し子』^{せいれいのいとこ}って呼ばれる、特別精霊に好かれる人でないと」

「それが、オレってコト？」

「うん。精霊たちが、コーヤさんのこと嬉しそうに呼んでいたから」「それで、コレがどうやら木の大精霊？試しに召喚させてみたってコトか」

先に説明してくれるともしっかりと良かったんだけど、と呟きながら大樹を見上げる。どうやら、精霊を召喚してしまったらしい。つまりこの樹は、自分のせい。

その証拠なのか、太い幹の真ん中に、小さくオパールもどきが挟まっている。まぎれもなく、さっきの精霊石から出た精霊なのだろう。

「うわ……。どうりゃいの」

頭を抱えてくなった。というか、実際に抱えた時、

『案ずるな、若き主よ。そなたに全ての木々と植物の加護を与えよう。我と私の眷属は、いついかなる時もそなたに力を与えよう』

どつしりした男の声が、降り注いだ。張りのある深く響く声。聞くものを全て包み込むような声に安堵し、洸夜は堂々と話しかけることができた。

先程までの途方に暮れていた気持ちが、するするとほどけていく。

「大精霊つてやつか？なあ、頼む！協力してくれるなら、とりあえずこの巨大樹なんとかしてくれないか？立派なんだけど、ちょっと邪魔なんだよね」

頼むと、返事はない代わりに、巨樹が一瞬揺れるように葉をざわめかせて——消えた。

驚きの表情をした人々が、ざわめきながら広場に集まってくる。

巨樹の残りだろうか、はらはらと一枚の緑の葉が舞い降りてきた。両手で受け止めると、

『いよっ！驚いたかー？俺が噂の大精霊さま！まあ、コーヤに加護を与えてやつから、これから宜しくつてな』

……喋った。茎のところで、手のひらの上にピンと立ちあがり、跳ねる。

漫画やアニメでは、よくある表現だと思うが、デフォルメされていない実際の葉っぱがぴょんぴょんコミカルに動くと、はつきり言っただけ悪い。

なんとも言えず、そのまま眺めていると、葉っぱは焦れたように体を揺すった。

『おいおい聞いてんのかあ？驚くのも無理はねえか。ホントの姿はさっきの馬鹿でかい樹なんだけだよ、あれじゃちつと動きにくいから、この姿のほうが気に入ってんだ』

威厳たっぷりのあの深い良い声はなく、渋いもののどこか軽いおっさんのような声で、ぺらぺら喋りつづける。ちよっと頭痛がしてきた。

「さっきまでの偉大な態度はどこへ……」

『あん？ああ、あれはお約束っつーか。固い挨拶な！』

「……どうすりゃいいの、これ」

さっきとは別の意味で途方にくれた。茎の部分をつまんで、逆さに持ちあげ、ヨルダにぴらぴらと振ってみる。

「大精霊の加護は絶大で、とても有り難いんだよ」

ヨルダは、受付嬢のようににっこり笑って、説明してくれた。張りつめた笑みがとても嘘くさい。

洸夜は、眉間に皺を寄せて、今度はまだ茫然として口を開きっぱなしのヴァインに、同じようにぴらぴら葉を振ってみた。

「見たがってた精霊です」

「あ……。いや、すごいな……」

色んな意味で。

『おお、そっちの姉ちゃんは、女神んとこの子かー。これから、ずっとコーヤの傍にいるから宜しくなっ』

「勝手に決めるなつて。こんな葉っぱよりぴよる纏わりつかれてたら、メーワク。ていうか失くしそう」

『なんだつてえ！そして振るな！遊ぶなっ』

無意味な争いをしていると、ようやく落ち着いたヨルダが、葉っぱをつまんだ。

「落ち着いて。初めまして、葉っぱさん。ヨルダと言います」

不気味な葉っぱにも、律儀に挨拶する。度胸があるというか、細かいことを気にしないというか……。

洗夜は呆れ顔で見ていたが、葉っぱはまともに相手をしてもらって、嬉しそうに跳ねた。

『おう！礼儀正しいな！ただ葉っぱって呼ぶのは止めてくれよな』

「じゃあ……どう呼べば？」

『そうだ、名前を主に付けてもらわねえと。これも決まりなんだよ。おい、名前！』

年季の入った夫婦みたく、『おい』だけで呼ばないでもらいたい。名付けるとなると、思い浮かぶのは一つだった。

「フレディ」

『おお、いい名前だな！』

「良い名前。さすがコーヤさん」

「元の世界で有名な、切ない葉っぱの主人公だ。世界中が泣いたはず」

『おおおい！感動話は良いけどよ、それって人に付ける名前としていいのか！』

「葉っぱ風情が。じゃあダニエル」

即答すると、まだ葉っぱは「ごちゃごちゃ」と言ってきた。

『絶対お前、ダニエルもなんかあるんだろ！』

「まあまあ。いいじゃないですか、ダニエルで」

ヨルダが宿めていると、冷たい風がひゅーと一筋流れた。

その途端、ヨルダの手のひらで踊っていた葉っぱが、飛ばされる。大精霊が風に負けた。

落ちて行った葉っぱをヨルダが慌ててつまみあげる。

「確かに、葉っぱの姿じゃ不便ですねえ」

「飛ばしとこう」

すぐに吠える葉っぱにいい加減疲れてきた。投げやりな態度をとると、ヨルダが苦笑しながら、葉っぱをそつとテーブルに置いた。

「コーヤさん。その首飾り、ちょっと貸して？」

「うん？ああこれか」

すっかり忘れていた黒石のペンダントを首から外し、手渡す。

ヨルダは、ペンダントもテーブルの上に置き、奥から工具箱のよつなものを取り出した。さらにそこから、釘を一本取り出すと、今度は葉っぱに向き直った。

（嫌な予感……。）

「ダニエルさん、ちょっと我慢してくださいね」

釘を構えて、ヨルダは安心させるようにほほ笑んだ。

『怖えええええっ！何するつもりだ、ちよっやめっ』

「さくつとな」

言いながら、言葉通りさくつと、葉っぱの上の部分に釘を刺して穴を開けた。

『別に精霊だから痛くないけど怖えええっ』

「痛くないならいいじゃないですか」

『笑って言うなー！』

喚く葉っぱをスルーしながら、今度はペンダントの紐を解いた。

葉っぱの穴に紐を通し、再び結ぶ。

黒い石と葉っぱのアクセサリー完成。森ガールが着けていそうだ。

「はい、これで飛ばないよ」

名案とでも言うように、洗夜に首飾りを手渡した。流されるまま、首に掛ける。

この日から、喚く葉っぱと黒い石がオレの胸にいつもぶら下がっ

ているようになった。

4 『精霊の愛し子』（後書き）

意外に容赦ないヨルダちゃん。

フレディはそのまますぎるので、あえてのダニエルになりました。

5 『娘の常識』（前書き）

軽い？グロ表現っぽいものがあります。
苦手な方は速やかにお戻りください。

5 『娘の常識』

『ぶらぶらとー。揺れる葉っぱはぶららりーん』

「訳の分らん唄歌うな。何気に五・七・五だし……」

「ダニエルさんご機嫌ですねえ」

葉っぱ——もとい、木の大精霊ダニエルを召喚して、広場の注目を集めてしまったため、後のことは父に任せてヨルダはコーヤと共に宿屋へ戻った。

街に出るとまた人に囲まれてしまいそうなので、厩で世話をするついでにコーヤにゼク達を見せていた。

ゼクは馬に近いが、羊のような巻いた角が特徴的だ。馬よりも速さは劣るが、耐久力が高いため、長旅で重宝されている。

キャラバンの貴重な財産の1つだ。

コーヤは、またもや目を輝かせている。

「オレ、馬とかあんまり詳しくないけど、可愛い顔してるなあ」

「つぶらな瞳が堪らないよね。この子が私の相棒、ルーク」

30頭ほどの中から、1頭を出す。撫でると、すりすり頭を寄せてきた。大人しいながらも、良く働く賢い子だ。

『いいゼクじゃねーか！おい、乗せてもらおうぜッ』

そうでしょうそうですね。自慢のゼクを褒められると、何よりも嬉しい。

「勝手な注文ばかり言うな」

「いいよ。でも乗れるのコーヤさん？」
「や。無理」

それなら、と2人乗り用の鞍を持ち出して、取りつける。ゼクは通常の馬よりも少し体が立派なので、大人2人乗りでも余裕がある。柵を開いて、裏道まで連れていく。大通りは人混みで通れないし、目立たない方がいいだろう。

まずヨルダが先に乗り、手を貸しながら後ろにコーヤを乗せた。

「ここに足を乗せて。そう、乗って。慌てずに」

「よつと……うわ、思ったより高いな」

「しっかり私に捕まって。落ちる」

コーヤの腕が、遠慮がちに腹部に回されたのを確認してから、ヨルダはゆっくりルークを進めた。

『おおー動いたぜ！ゼク乗ったの初めてだ！』

「乗ったのはオレ。葉っぱは、ぶら下がってるだけだろ」

『葉っぱって言うな！』

ぎゃあぎゃあと言い合う後ろの声を聞きながら、街の外へ出る。街から少し離れたところには、大きな川があるから、お散歩にここまで行こう。春のぽかぽかの日差しを受けながら、田園風景を進むのは随分気持ちが良い。

近くの木にゼクを繋いで、大きく背伸びをした。釣りをしている人影もなく、静かだ。

コーヤは川の傍へ走り寄って、水面を覗きこんだ。

「水、綺麗だなあ！」

「そう？コーヤさんのところは汚かったの？」

「あー……うん、すごく。東京っていう馬鹿でかい街の中だったからなあ……」

つぶやきながら、手を水に浸して遊んでいる。屈んだせいで、ペンドントが水に浸かり、ダニエルが悲鳴をあげた。

『水とは仲いいけど、水浸しになっても嬉しくねえんだよ！——あはば、沈めるな！』

「木ですもんね。じゃあ、火の大精霊は苦手？」

『うーん苦手ではねえよ。土のヤロウのほーが気に食わねえな』

「けど、いいの？ヨルダさん」

「うん？」

ゼクに水を与えていると、コーヤがダニエルを水に沈めながら振りかえった。

「これ。葉っぱ、もらっちゃったみたいだけど。精霊石は商品だったんじゃ？」

「ああ、平気。大精霊を従える人なんて、滅多にいないから、商品にならないもの。そりゃあ、欲しがって買い取る人はいるだろうけど」

「買い取ってくればお金になるじゃん」

「精霊ってね。召喚した人に加護を与えるけど、大精霊は全ての人

に影響を与えるの。力が絶大だから」

「葉っぱがねえ……」

コーヤは一度水から引き上げて、つつく。

「だから、大精霊の精霊石だけは、商品にせず、相応しい持ち主が現れるまで悪い人に渡らないように守る。精霊石商人の決まりことよ」

「オレ、相応しい？」

照れるでもなく、困ったように言いながら葉っぱを絞った。ぎゅうとされて、ダニエルから汁がぼたぼた落ちる。普通の葉っぱならボロボロになってしまいが、ダニエルだから大丈夫のようだ。

ゼクから離れて、コーヤの隣にしゃがみこんだ。

「精霊が選んだからいいのよ。『精霊の愛し子^{せうれいのこころ}』なら、根は悪い人ではないだろうし。それにもしかしたら、故郷へ帰る手助けになるかもよ？」

「そうなのか、葉っぱ？」

『お前ら、俺を虐待しながら手助けを期待するなーっ』

少なくとも、帰る方法を探す邪魔にはならないだろう。コーヤとダニエルは会って数刻も経っていないのに、こんなに気のおけない仲になっているし。

コーヤに倣ってダニエルに水を掛けながら、考える。

『で、おい、姉ちゃんよ。遊んでないでどーする気だ』

水音に紛れて、ダニエルらしくない小さな声で問われた。さすが

に大精霊だ。気配に聡い。

「うーん。協力してね。コーヤさんは、前に出ないで」
「は？」

コーヤが首を傾げているうちに、背後から足音が入り乱れた。ざつと5、6人か。背中に威圧感を感じる。
すぐに、野太い声が降ってきた。

「おい、そこのお前ら。余所もんだろ」
「ゼクなんか連れやがって。昨日着いたっつーキャラバンのもんだな。立てよ」

溜息を一つついて、相手を刺激しないように、ゆっくり立ち上がって振りかえった。コーヤも同じように立ち上がる。
痩せて薄汚れた男どもが6人。ニタニタ笑いながら、手の平でナイフを弄んでいる。

盗賊、追剥、人攫い。
まだ日も暮れないうちからご登場とは、やはり最近の治安は荒れているようだ。

ヨルダが冷めた目で見返すと、男どもがどよめいた。

「す、すげえ上玉。ひひ、連れてこーぜ」

「金を置いてつてくれりゃあ、逃がしてやつても良かったんだが。美人は損だなあ？」

「こいつ連れて、キャラバンの連中からも巻きあげりゃあ、儲けもんだな」

つまり、人質にとって、キャラバンに身代金を要求と。
目の前に立つリーダー格の男が、ヨルダに手を伸ばした。

怖れるように、僅かに後じさると、男は笑みを深くした。

「それを目の前で相談しちゃう辺りが、下っ端ね」

肩に手が触れる直前。挑発し、男の腹を右から横薙ぎに蹴り飛ばした。足を引いておいた分、弾みがついて程良くヒット。

隣に立っていたゴロツキその2を巻きこみながら無様に転がるのを見終わる前に、残りの連中がナイフを振り上げ、襲いかかってくる。

上げた右脚の太ももから、隠しておいたナイフを抜き取り、片手で続けざまに3本投げてやる。

命中を見るまでもなく、もう片方の手で、コーヤにナイフを振り下ろそうとしていた男の手をつかみ、捻って体ごと地面に押さえつける。

男が落としたナイフを首筋に当て、終了。

「ダニエルさん」

『あーいよ』

まだ動ける男が置きあげる前に、蔦が草むらから伸び、6人全員を縛り上げた。

「棘つきって残酷」

蔦に巻かれ、太い棘がいくつも刺さった皮膚から、血が流れ落ちている。

『6人平気でぶちのめした姉ちゃんに言われたくねえ……』

「旅していると色々ありますから。ついでに棘に毒って仕込めます？」

『……おい』

「麻痺毒で」

『はあ……人使いが荒れえなあ』

ブツクサ言いながら、蔦の棘が増える。同時に、ぱたりと男の呻き声が止んだ。

一瞥して、問題が無いのを確認すると、もうそちらは見もせずに、コーヤの様子を窺った。

「ごめん。怖かった？」

目を見開いて立ったままのコーヤにひらひらと手を振ってみると、途端にその場に崩れ落ちた。

コーヤは膝から草の上に座り込んで、息が震えている。

「本当に、ごめんね？まだ日が暮れるまで時間があるから、安全だと思っていたの」

「……いや……」

屈んで目を合わせると、黒い瞳は揺れながら逸らされた。

「とにかく、街へ戻ろう。歩ける？」

「ああ」

コーヤは顔を上げないまま、立ちあがる。

ヨルダはゼクの綱を解いて素早く騎乗し、手を差し伸べた。

掴んだ手も、再び腹部に回された腕も、街に着いてゼクから下ろすまで、ずっと小刻みに震えていた。

「馬鹿かつ……治安が悪化していると言っただろう！」
「ごめんなさい」

父と兄を呼び、街の警備兵に事情を話して街の外のゴロツキどもを捕えてもらった。

当然ながら、心配をかけた2人には怒られるわけで。

夕刻。食堂の真ん中に仁王立ちになったリユークが、怒鳴った。
父はその横でむっつりと押し黙っている。

本気で怒ると、リユークは口煩くなり、父は押し黙る。

キャラバンの仲間は静かに、ただ若干はらはらしながら見守っている。

「必ず、誰かに言ってから出る様にと、あれほど！二度と勝手に外へ行くなっ」

「はい」

言い終わるとリユークは、他の人を押しのけて、荒々しく食堂を出て行った。

父が顔を顰めたまま、一步ヨルダに近づいた。

「小さい子だったなら抱きしめて宥めてやるがな、ヨルダ」
「はい」

名を呼ばれて顔を上げると、勢いよく頬を張られた。口内に鉄の味が広がる。

一瞬、食堂がざわついたが、父の表情を見て、またすぐに静り返った。

「明日も早い。皆もう寝る様に」

誰よりも痛みを噛みしめるような顔をしたまま、父も食堂を出ていき、その場はお開きとなった。

叱られ終わったヨルダは、迷わず2階のコーヤの部屋の戸を叩いた。

誰かを名乗る前に、戸が開かれた。

そのまま部屋に入り、簡素な椅子の上に腰を下ろすと、コーヤは向かい合わせにベッドに腰を下ろした。

こちらの頬を見て、目を見開く。

「どうしたの、ソレ」

「あはは、怒られちゃった。心配かけたし……」

「厳しいんだな」

頬を押さえて笑うと、コーヤは痛そうに目を細めた。ダニエルは黙って、コーヤの胸元で揺れている。

「うっん。当たり前」

キャラバンに若い女はヨルダ一人しかいない。珍しい容姿と相まって、いつも父とリユークに心配ばかり掛けていることを十分理解しているつもりだ。

心配したときの悲しそうな顔を見ると、いつもヨルダは泣きたく

なる。

「……そうだよな。ちょっと外へ出たら、あんなのに遭遇するんだ。厳しくなってる当然か……」

そう言っで、俯いたまま両手で顔を覆った。

「オレさ、帰りたいかったのはもちろんだけど、ちょっと楽しかったんだ。開き直った楽しみ方だったけど、それでも。精霊とか、見たこともない動物とか見ながら楽しんだ。けどさ——」

ぎりつと歯の軋む音がした。

「帰りたい……っ！……！」

「……」

「オレの世界じゃ、こんなことない。いや、本当はあるだろうけど、それでもこんなに当たり前みたいじゃなかった！悪い奴だっていたけど、でもほとんどの人は、無関心だったり疲れてたりしながら、それでも基本的には優しくかった！」

ヨルダは、黙って見つめていた。何を言っても嘘くさい慰めにしかならないと分っているから。

「なあ、葉っぱ。オレがこんな世界に着ちゃった原因で、わかるか？」

『すまん。分からねえ』

「じゃあ、何が切っ掛け？この黒い石に、ヨルダさんが触ったこと？」

『それは……』

「ヨルダさん。別に、怒らない。今日遭ったことなんて気にしない。

だから今すぐオレを帰してくれよっ!!」

コーヤの叫び声は、かすれていた。

分らない。ヨルダに分かるのは、キャラバンや旅のことだけだ。この髪と目のおかげで精霊石や精霊にちよつと詳しいだけだ。

世界の違いなんてものも、異世界なんて存在も、ましてや帰り方なんて分らない。

黒い石に触れて、精霊の声を聞こうとした。いつも通りの、それだけしかしていない。

けれど、それがコーヤの苦しみを作ったのなら、やはりヨルダのせいだろう。

「ごめん、なさい……」

声は震えてしまったけど、泣いてはいけないと強く念じて、涙を引っ込めた。

5 『娘の常識』（後書き）

ヨルダ：職業、旅人。格闘タイプ。隠しスキルはナイフ投げ。
コーヤ：職業、迷子。精霊召喚タイプ。隠しスキルは葉っぱイジメ。
葉っぱ：職業、精霊。いじられタイプ。

なぜ人間キャラはみんなさっ気たっぷりになってしまっただろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5358q/>

勇者の召喚者。

2011年2月12日03時43分発行